

## 連続講座「中国はどこへ行くのか」 第1回

### 「日中関係の歴史、現状と未来」

汪鴻祥(おう こうしょう、杉達大学助教授、本研究所理事)

2002年10月13日(日) かながわ県民センター711号室

今年の日中国交30周年記念の年である。この30年間の日中関係は、経済、文化から政治、社会まで、政府レベルから民間レベルまで様々な発展を見せた。日中両国は2000年余りの友好交流の歴史を持っている。2000年余りの長い間、日中両国は不愉快なこともあったが、友好が両国関係の主流であったということを忘れてはいけない。

1949年中華人民共和国が成立してから1971年まで、日中両国政府関係が断絶状態だったが、日中民間外交と民間友好交流が様々な進展を見せた。1972年国交正常化以来30年間、日中関係は全面的な発展を実現し、全方位的な交流を展開している。

しかし日中の世論調査によると、歴史認識の問題では日中間になお隔たりがある。それは歴史教科書と靖国神社公式参拝問題である。私たちはこの問題を次の三つの視点から考えるべきであろう。第1は中国を侵略し、多大な人命と物的損害をもたらしたあの戦争の責任はごく少数の軍国主義者だけが負うべきであり、日本国民も戦争の被害者だということ。第2は戦後の日本は少数の右翼による「戦争の美化」などの騒ぎが時々あったが、大多数の日本人は平和を守り続け、現在も平和を望んでいること。第3は日中双方の努力で、歴史認識問題に早く終止符を打ち、未来志向の認識に転じるべきであるということである。

現在は日中関係の転換点である。その要因として以下の4点があげられる。第1は中国経済の成長による対等な経済関係の構築である。第2は中国社会構造の変動と中流意識の増加及びインターネットなど情報手段の発達である。第3は冷戦の終結、米国一極支配といった国際情勢の変化である。第4は日中間の多分野の様々な交流の拡大である。

2001年は日中関係が大きく揺れ動いた。歴史教科書、台湾前総統の訪日、セーフガード、靖国神社参拝など多くの問題が生じたが、日中両国は個々の問題での事態悪化を避け、様々な妥協が図られた。日中関係において問題解決のメカニズムはすでにできているのである。日中両国は、緊張状態があった後には必ず関係改善への努力が行われており、日中関係は緊張と協調の関係が繰り返されながら発展していくと思われる。

最近、日本のマスコミから日中関係「悪化」の論調が聞かれた。私たちは日中関係が色々な困難を抱えながら様々な希望を持っている新しい成熟段階にあり、日中関係は「悪化」しているのではなく、「深化」していると考えられるべきであろう。日中関係の「深化」は、ヒト・モノ・カネの流れに端的に示される。国交正常化の1972年に、両国の人々の往来はたった9000人だったが、2001年には200万人を超えた。1972年に両国の貿易額は10億ドル余りだったが、2001年に900億ドル近くに達した。また、日本の対中国直接投資は海外対中投資の第3位を占める。今後日中関係の発展は両国の経済、政治及び国際環境の変化など色々な要素の影響を受けるであろう。日中関係を促進する要素があるが、日中関係を阻害する要素もある。全体的に見るとプラス要素がマイナス要素より多い。私たちは日中関係の発展には明るい未来があると信じている。

21世紀日中関係の新しい構図として、以下の4点を指摘したい。第1はグローバル化時代において、日中関係は両国の視野を超え、グローバルな視野で考えること。第2はいままでの国家間交流である「国交」から、社会・民間の交流である「社交」へと拡大していくこと。第3は日中両国の世代交替が進んでいる中、未来を担う若い世代に期待し、若い世代の友好交流を促進すること。第4は日中両国はアジア経済圏を担うパートナーとして、相互理解を深め、「競争」関係ではなく共同創造である「共創」関係を確立することが必要である。